

永谷 侑子（慶應義塾大学）

5月18日（日）13:15-13:55 戸山キャンパス 36号館5階581教室 第三分科会

---

---

小林清親の光線画  
—人物および大気現象の描写を中心に—

---

---

幕末明治期に活躍した画人、小林清親(1847～1915)は、多くの優れた風景木版画を発表し、「最後の浮世絵師」や「明治の広重」などと称される人物である。清親の代表作である一連の木版画『東京名所図』（版元松木平吉、明治9～14年）には、陰影法や明暗法など、西洋絵画の技法がふんだんに取り入れられ、それら作品群は一般に「光線画」と称される。幕末から明治期における浮世絵界では、光線画に類する画風の木版画を探し得ず、清親の試みた表現は極めて異質であると言うことができよう。しかしながら従来、光線画が「革新的である」と評価されてはいるものの、清親独自の描写の特徴を、より具体的に呈示するための考察には、未だ多くの余地が残るものと考えられる。

本発表では、清親作品と西洋の作例との関連性をも考慮に入れながら、『東京名所図』を中心とした光線画の諸作品を分析することによって、先行研究では十分な言及がない清親による人物の描写や、大気現象の描写について、どのような特徴が認められるのかを具体的に示したい。

『東京名所図』全93図における人物描写の特徴に着目して、このたび発表者が行った分類に基づく、光線画の中には、あえて表情を隠すような姿や、単なるシルエットで表される人物が頻出することが確認できる。このような人物描写には、江戸から明治への過渡期に、人々が心のどこかで共有していたであろう複雑な心情や、清親自身の内面に潜む葛藤が滲み出ていることが指摘できる。また、移ろい行く大気現象の描写に関しては、水彩画や油彩画とも相通ずる卓越した色彩、輪郭線の排除などの工夫によって、清親が、月・星・雨などを象徴的に描き込むことなしに、しかし、時間帯や天候を暗示的に表現する技に成功していることが認められる。

光線画における、以上のような諸々の特徴は、『東京名所図』のみならず、清親の絵画作品にも顕著である。清親筆《開化之東京両国橋之図》（太田記念美術館蔵）は、アメリカ人画家ホイッスラー作『ノクターン』シリーズとの類似点が既に指摘されるが、このたび発表者は、先行研究において一切取り上げられていない、フランス人画家シャルル・ラコストによる風景画にも注目し、単に構図やモチーフの一致のみに留まらない、清親作品との共通点の指摘を試みたい。

清親は新時代の題材の採用に依拠した画面作りには意を用いず、従来の浮世絵にはみられない独自の色彩感覚や創作の意図をもって、しかしあくまでも江戸時代以来の伝統的な名所絵の枠組みの中で、結果的に鑑賞者の想像力をかき立て、より深い作品世界へと導く風景画を制作した、という観点を用意する必要があるものと考えられる。

清親が生んだ光線画は、江戸と明治の日本画壇を結ぶ橋梁であり、作例を子細に分析することによって、清親が担ったこの重要な役割についても、再確認をしておきたいと考えている。